



《このページの原典》

『花江都歌舞妓年代記（はなのえど かぶきねんだいき）』

巻之一・初編二 烏亭焉馬 著、松高斎春亭 画

天保12年・1841年刊（国立国会図書館所蔵）

外郎売の台詞

拙者親方と申すは、お立ち合いの内に御存知のお方もござりましょうが、お江戸
を發つて二十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへ
お出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪致して、円齋と名乗ります
る。元朝より大晦日まで、御手に入れます此の薬は、昔、ちんの国の唐人、
外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、此の薬を深く籠め置き、
用ゆる時は一粒ずつ、冠の隙間より取り出す。依つて其の名を帝より、
透頂香と賜る。即ち文字には、頂、透く、香と書きて、とうちんこうと申す。
只今は此の薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出し、イヤ小田原の、灰俵
の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、平仮名を以てういろうと致したは、
親方円齋ばかり。若しやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるか、
又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。お登りならば右の方、

お下りなれば左側、八方が八棟、表が三つ棟玉堂造、破風には菊に桐の臺の
くだ ひだりがわ はつぼう やつむね おもて み むねぎよくどうづくり はふ きく きり とう
 御紋を御赦免あつて、系図正しき薬で御座る。イヤ最前より家名の自慢ばかり申
ごもん ごしやめん けいずただ くすり ごさ さいぜん かめい じまん もう
 しても、御存知ない方には、正身の胡椒の丸呑、白川夜船。さらば一粒食べか
ごぞんじ かた しょうじん こしやう まるのみ しらかわよふね いちりゆうたべ
 けて、その気味合をお目に懸けましょう。先ず此の薬を、かように一粒舌の上
の きみあい め かけ ま こ くすり いちりゆうした うえ
 へ乗せまして、腹内へ納ますると、イヤどうもいえぬは、胃肝肺肝が健やかに成
の ふくない おさめ いかんはいかん すこ な
 って、薫風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。魚、鳥、木の子、麵類の食
くんぷうのんど きた こうちゆうぶりよう しょう うお とり き こ めんるい く
 い合わせ、其の外、万病速効あること神の如し。扱、此の薬、第一の奇妙には、
あ そ ほか まんびようそっこう かみ ごと さて こ くすり だいいち きみよう
 舌の廻ることが銭独樂が裸足で逃る。ひよつと舌が廻り出すと、矢も楯も堪らぬ
した まわ ぜにごま はだし にげ した まわ だ や たて たま
 じゃ。そりやそりやそりや、そりやそりや、廻つて来たわ、廻つて来るわ。アワ
の ど した げ しおん ふた くちびる きようじゆうかいこうさわや
 や咽、サタラナ舌に、カ牙サ歯音。ハマの二つは唇の軽重開口爽かに、あ
かしたな、はまやらわ。 おこそとの、ほもよろを。 一つぺぎへぎに、へぎほし、
 はじかみ。盆豆、盆米、盆牛蒡。摘蓼、摘豆、摘山椒。書写山の社僧正。小米
なまがみ こごめ なまがみ こごめ なまがみ しゆすひじゆす しゆすしゆちん おや かへえ
 の生嚙、小米の生嚙、こん小米のこ生嚙。繻子緋繻子、繻子繻珍。親も嘉兵衛
こ かへえ おやかへえこかへえ こかへえおやかへえ ふるぐり き ふるきりくち あまがつば
 子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。古栗の木の古切口。雨合羽
ばんがつば きさま きやはん かわぎやはん われら きやはん かわぎやはん しつかわばかま ぼころ
 が番合羽か。貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。尻皮袴のしつ綻びを、
みはりはりなが めう めう だ かわらなでしこのせきちく のらによらいのらによらい
 三針針長にちよと縫て、縫てちよとぶん出せ。河原撫子野石竹。野良如来野良如来、
みのらによらい むのらによらい いっすん こぼとけ けつまず ほそみぞ どじよ
 三野良如来に六野良如来。一寸のお小仏にお蹴躓きやるな。細溝に泥鰌によりり。
きよう なまだら なら なままながつお しごかんめ ちゃた ちゃだ
 京の生鰯、奈良、生学鰹、ちよと四五貫目。お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと
たちよ、茶立ちよ。 青竹茶筌でお茶ちやと立ちや。 来るわ来るわ何が来る、高野
 の山のおこけら小僧、狸百足、箸百膳、天目百杯、棒八百本。武具馬具、武具
やま の山のおこけら小僧、 狸百足、 箸百膳、 天目百杯、 棒八百本。 武具馬具、 武具
 馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具。菊栗、菊栗、三菊栗、合わせ
きくくり むきくくり むぎ むぎ みむぎ あ むぎ むむぎ あ
 て菊栗六菊栗。麦ごみ、麦ごみ、三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。あの長押
ながなぎなた た ななぎなた むこ ごまがら え ごまがら まごまがら
 の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。向うの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれこそ

本の真胡麻殻。がらびいがらびい風車。おきやがれ小法師、おきやがれ小法師。
昨夜もこぼして、又こぼした。たあふぽぽ、たあふぽぽ、ちりから、ちりから、
つつたつぽ。たばたば、干蛸落たら煮て食を。煮ても焼いても食われぬ物は、五徳、
鉄弓、金熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎鱧。中にも東寺の羅生門には、茨木
童子が、うで栗五合、掴んでおむしやる。かの頼光の膝元去らず。鮎、金柑、椎茸、
定めて後段な、蕎麦切り、素麺、鰻鮓か、愚鈍な、こ新発知。小棚のこ下に、小桶
にこ味噌がこ有るぞ。こ杓子こ持つて、こ掬てこ寄せ。おっと合点だ、心得たん
ぼの、川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は走って行けば、灸を擦りむく、三里ばか
りか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天そうそう、
相州小田原透頂香。隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう。あれ、
あの花を見て、お心をお和らぎやつという。産子、這子に至るまで、此のうい
ろうの御評判、御存知ないとは申されまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼ
う眉に、臼、杵、搗鉢、ばちばち、ぐわらぐわらぐわら（がらがらがら）と、羽目
を外して今日御出の 何も様に、上ねば成らぬ、売ねば成らぬと、息せい引つ
ぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も上覧あれと、
ホホ敬って、ういろうはいらつしやりませぬか。

● 一ページ本文六行目で、『用ゆる時は』と表記した部分は、「用ゆる時々」とする資料も見られます。『花江都歌舞妓年代記』（以下、『年代記』）で使われている文字は『用ゆる時々』で、踊り字の『々』（同の字点）が使われているようにも見えますが、これは、変体仮名で「は」に使われる文字の一つの、「と」の形ではないかと思われます。『年代記』では、「何々は」の場合、『又ハ伊勢の系宮』（または伊勢…）などと「ハ」の文字が多用されていますが、『此君も今』（この君は今）のように、「盤」の字を崩した「と」に似た字も使われおり、また、一文字の繰り返しには「々（同の字点）」ではなく、『人々これを』のように「と（二の字点）」が多いようにも見受けられるため、ここでは、『用ゆる時々』は、『用ゆる時は』としました。

● 一ページ本文六行目の『冠』の読みは、「かんむり」とする資料が見られますが、ここでは「かぶり」としました。「冠」は、「かがふり」「かがほり」「こうぶり」「かむり」「かぶり」などともされ、『年代記』では『冠のすきま』（かぶりのすきま）と、振り仮名が「かふり」となっていることから、ここでは『かぶり』としました。『かむり』とする資料も見られます。

● 一ページ本文七行目の『透頂香』は、『年代記』では『頂透香』と表記されていますが、正しい表記の『透頂香』としました。『頂透香』は著者烏亭さんの誤記ではないかと思われます。説明の部分は、『透頂香』と書く、返り点での読み方と捉え、『頂透く、香』のままとしましたが、烏亭さんの誤記と思われる書き方からすれば、『透く、頂、香』とも考えられます。

● 二ページ三行目で、『臺の御紋を御赦免あつて』とした部分は、「御赦免ありて」とする資料も見られますが、『年代記』では『御赦免ありて』とあって、『有』に振り仮名が振られていません。従って、『有て』を『ありて』と取るか、『あつて』と取るかの違いかと思われますが、全九巻からなる『年代記』では、「有て」と振り仮名を振った部分は一か所のみで、「有て」とした部分は、『富三郎といろいろ有て』（富三郎といろいろ有て）『御高免有て』（御高免有て）など少なくとも四か所ありました。その四か所の中でも、『御赦免有て』に近い表現として『御高免有て』があることなどから、ここでは『御赦免あつて』としたものです。なお、『外郎売』の初演からおよそ百年後に書かれた、十返舎一九の『続膝栗毛』に登場する「ういろうり」の口上では、『御赦免あつて』と、『ありて』となっています。

二ページ十行目で、『サタラナ舌^{した}に』とした部分は、『舌^{ぜつ}』とする資料も見られますが、『年代記』では振り仮名が振られていません。これは『五音^{ごいん}』と言われる発声を表すもので、前後に「咽^{のど}・牙^げ・齒^し・唇^{くちびる}」と出て来ます。『年代記』での『五音』の読み方は音訓が混在しているため、『舌』は、『した』『ぜつ』のどちらも考えられますが、ここでは、『年代記』に出来るだけ近い年代の文献を引くこととし、明治十六年・1883年刊の『市川團十郎お家狂言』により『舌^{した}』としました。なお、「サタラナ」など、片仮名とした部分は、『年代記』では平仮名ですが分かりやすくするために表記を変えました。

二ページ十二行目の『軽重』の読みは、「けいちよう」とする資料が見られ、現代ではそのように読むのが一般的ですが、「きようじゅう」や「けいじゅう」とも読まれ、『年代記』では『唇^{くちびる}の軽重』と、「くちびるのきやうじゅう」と振り仮名が振られていることから、ここでは『きようじゅう』としました。

二ページ十三行目で、『一つへぎへぎにへぎほしはじかみ』とした部分は、「一つへぎへぎにへぎほし」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『一つへぎへぎほし』で、変体仮名で「へ」として使われる「へ」などの字に近い文字が見られるため、ここでは、『一つへぎ』としました。『年代記』では、数を数える場合「一ツ・二ツ」など、「ツ」の字が使われ、ここも「一つ」と捉えることも出来ますが、続く字が「へ」となっているため『一つへぎ』としたものです。『年代記』では他に、「一ッたゐい（いっぱい）」なども見られます。ちなみに「たゐ」は、「者」という字を崩した「は」と読む変体仮名で、『へぎ』の次ぎに来る『よ』は、「尔」という字を崩した「に」と読む変体仮名です。

三ページ二行目から三行目にかけての「菊栗」と「麦ごみ」のくだりは、『年代記』では、「菊栗菊栗三菊栗 合せて 麦ごみ六麦ごみ」となっていて、菊栗の「六」と、麦ごみの「三」が欠落した形となっているため、「菊栗菊栗六菊栗」や「麦ごみ 麦ごみ 三麦ごみ」などを加えて形を整えました。

三ページ七行目で、『ちりから ちりから つたつぽ』とした部分は、「すったつぽ」とする資料も見られますが、『年代記』では『はつぽ』となっていて、「は」という字は「徒」という字を崩した「つ」と読む変体仮名であるため、ここでは『つたつぽ』としました。ちなみに「は」は「多」という字を崩した「た」と読む変体仮名で、「は」は「保」という字を崩した「ほ」と読む変体仮名です。

● 三ページ九行目で、『干蛸』とした部分は、「一丁蛸」とする資料も見られますが、『年代記』では『なぢく子だこ』となっています。これを「一丁」と読めないこともありませんが、「欄干橋屋藤右衛門」の下りに出てくる「欄干」の「干」の字が『欄干橋』と書かれていて、『なぢく子だこ』と同じ表記であることから、ここでは『干蛸』としました。

平成二十一年・2009年の、国立劇場十一月歌舞伎公演での台本では、「タッポタッポ干蛸 落ちたら煮て食うを」となっていて、十二代目團十郎は「タッポタッポ いっひだこ おちたらにてくうを」と演じました。

● 三ページ十三行目で、『たんぼ』とした部分は、『年代記』では「たんぼ」（たんぼ）としています。これは「田圃」のことと思われ、ここでは、現代の一般的な読み方の『たんぼ』としました。「ぼ」は、「本」の字を崩して「ほ」と読む変体仮名に半濁点を付けた文字です。

● 三ページ目、後ろから六行目の、『お心をお和らぎやっ』とした部分は、「おやわらぎや」「おやわらぎやい」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『おやわらぎや』で、「や」は「也」という字を崩した「や」と読む変体仮名、「心」は「川（州）」という字を崩して「つ」と読む変体仮名です。従って、ここでは『お和らぎやっ』と表記しました。発音としては『お和らぎやあ』が近いかと思われます。この音は、続く「産子、這う子」にも掛かる「おぎやあ」という赤ん坊の泣き声とも捉えることも出来るかと思えます。

平成二十一年十一月公演での十二代目團十郎は、『お心をお和らぎやアという』と演じました。

● 『産子這子』の『這子』は、『年代記』では旧仮名で『はふこ』としているため『ほうこ』としました。「這子人形」という言葉があります。

〔知識〕

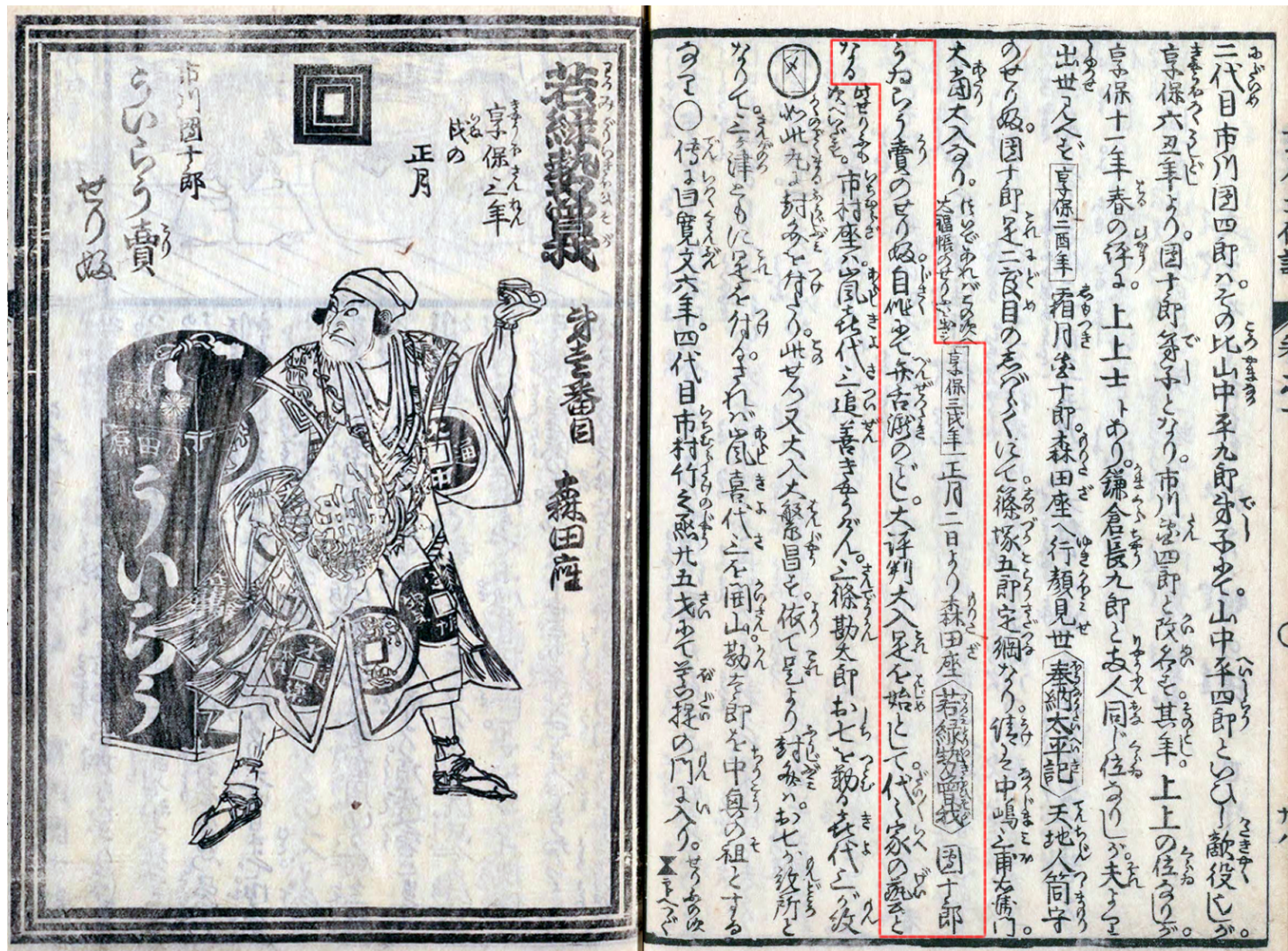
三ページ目、後ろから五行目の、『産子這子に至るまで』のくだりを、平成二十一年十一月公演での團十郎は、『産子這子に玉子まで』と、三つの言葉を「子」で韻を踏み演じました。

これは、昭和五十五年・1980年歌舞伎座初演の野口達二台本によるものです。

『花江都歌舞妓年代記』（はなのえど かぶきねんだいき） 卷之一

烏亭焉馬（うていえんば）著 天保十二年・1841年刊（国立国会図書館蔵）
 ・享保三年・1718年に関する記述

享保三戊年 正月二日より 森田座
 『若緑勢會我（わかみどりいきおいそが）』
 團十郎 ういろう売のせりふ。自作にて弁舌瀧のべとし。
 大評判 大入り。これを始めとして、代々、家の芸となる。



・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・いろいろ売りのせりふ」（1／3）

うならし賣のせぬ
市川園十郎

杜若親方と申は。此合の中に出るのお方もござり候ぞ。
かゝいをきて二十里上方に別山田所一志村をもよおされ。
(あつて) 杉町を出で入にお出なさるれば、欄干橋虎頭殿を逢ひ只今も
利發にてお母さまのはさるえ知より大晦日まで休む
(ふくみ) お入する此事が昔ちへんの國の唐土から来るもの人々といふ
身の内帝命因の折らけ給ふべく筆を用ゆる計を一粒
冠のそろそろ取り取らせ依てその名を帝なり頂透香とまづ。
列女あるいはれなく書と書いてうちんきすべし只今は其
時の對世上にはなやうぐお似看振をしてイヤぢやられば儀の
さ儀の模倣のとしく中世でも平かなどとりてうならしめ
ば又奴方が多分難なり。臣やお立合の間は勢海城の邊へ
湯治もお出なさるう。又は侯勢ゆき東宮の折らね必ぞ。口づけひ
まれしとするは貴なる右の方。お下られれた側八方八棟
ありてご守棟玉堂造となほ兄弟相のなられ後夜を以救免
有て素居正した事としざるイヤ家務あの家を待ぢまんできても
中でも客ながら方には二宵の胡椒の丸吞白羽衣様さらへ一粒
たびびてそき御食とお目くら星させう先づ葉をかきたに一粒古
の上へのそばして腹内へ絶たせるハイヤとあら入れにいけん肺肝が
すとちふ旅で苦風咽との耳の中にとやうとせまるうに魚
とも木の子顔敷の冷合せ。それ外病遠切あれこれ神のじ
板け兼第二の妻姫といふ音の早うつらう強いはるとじて述べる。
ひろいつながりのあやと。夫の権もあるなや。そのやくへ
そこちやへもうけてはおいらせいといふにあわや酒にならん言や。

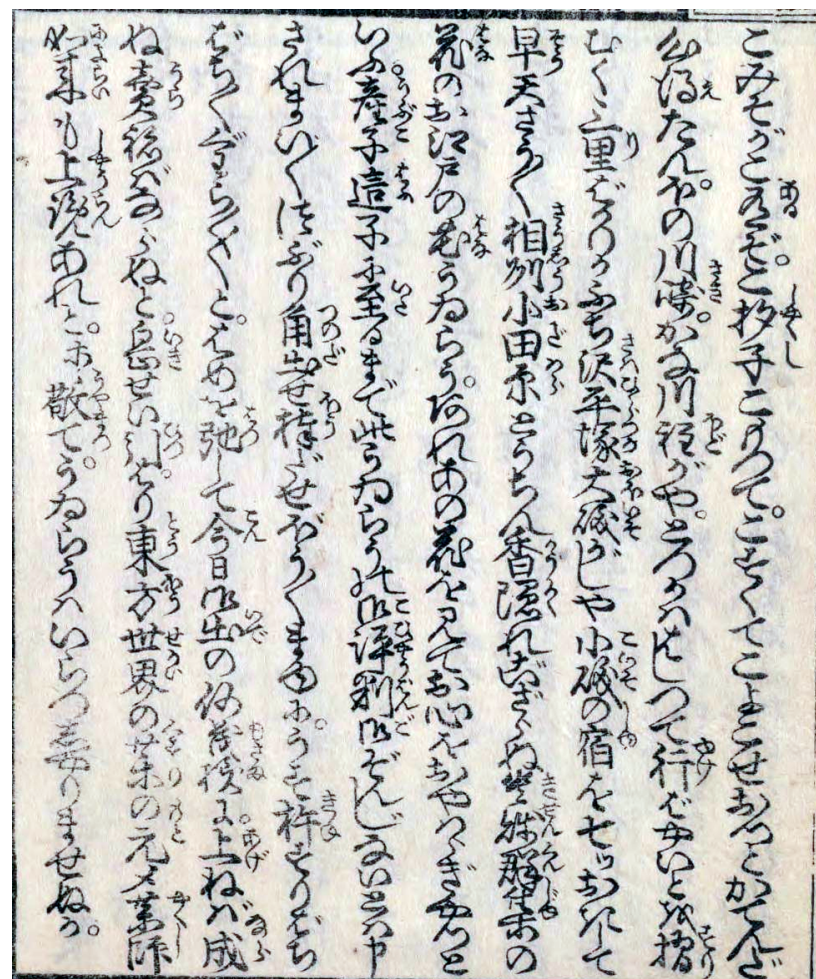
・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・ういろう売りのせりふ」（2／3）

[illegible]

*このページの、後ろから九行目の「長長刀(なかなき)」は、「長長刀(ながなぎなた)」ではないかと思われるため、文字起こしでは「ながなぎなた」としました。

《資料二》

・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・ういろう売りのせりふ」（3／3）





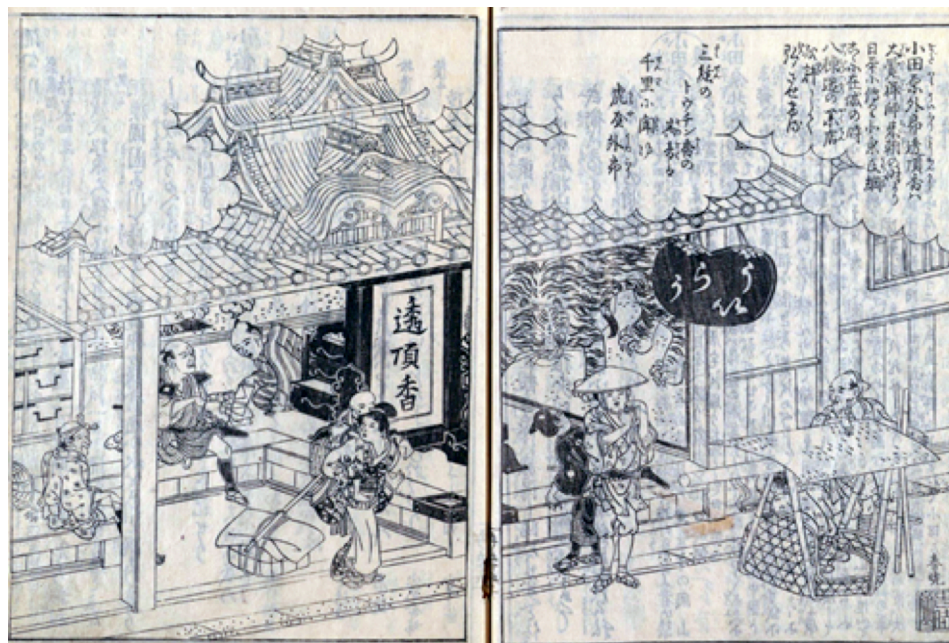
名取春仙画
『似顔畫集-創作版畫[2] 第十五』
外郎賣 市川三升
大正14年-昭和2年・1925-1927年
(国立国会図書館所蔵)

2016年(平成28年)2月
2008年版改訂
みんなの知識 ちょっと便利帳

「外郎売・ういろ売り」は、享保三年・1718年正月二日から、二代目市川團十郎によって江戸・森田座で上演された『若緑勢會我（わかみどりいきおいそが）』の中の台詞。

團十郎の自作で、『弁舌瀧のごとし。大評判で大入り』であったとされ、これ以降、成田屋の家の代々の芸となり、歌舞伎十八番（かぶきじゅうはちばん）の演目の一つとなった。

歌舞伎十八番は、成田屋の家の芸の集大成で、七代目團十郎が「市川流」の「歌舞妓狂言組十八番」の制定を公表したのは、天保三年・1832年三月の市村座。



『東海道名所圖會』 寛政9年・1797年 (国立国会図書館所蔵)



豊国画
『歌舞伎十八番 外郎』
「虎屋東吉 九世市川團十郎」
嘉永5年・1852年
(国立国会図書館所蔵)